

## 〈論説〉

# 南社における汪兆銘の活動に関する小考

王 晟 旭

要旨：汪兆銘は、日中戦争時の選択のため、政治面で議論されてきた。しかし、彼は政治家であると同時に、文学的素養も高く、近代中国文学史に一定の地位を持ち、南社のメンバーでもある。一方、南社は中国近代最大の文学組織であると同時に、政治性と革命性を兼ね備えている。しかしながら、従来から汪兆銘に対する研究は政治的な角度に集中することが多く、文学的な角度からの研究にはまだ大きな空間がある。特に、筆者が調査したところ、南社に関する研究はすでに多くあるが、汪兆銘の個人的な特殊性のため、南社での活動はほとんど口を閉ざすことが多いというような傾向が見られた。そこで、本稿は先行研究に基づいて、南社で汪兆銘の活動をさらに探求しようとする。

キーワード：中華民国史、汪兆銘、南社、中国文学、『雙照樓詩詞藁』

## 第一節 南社と中国革命

1908年、社会活動家陳去病は一昨年清政府に殺害された徐錫麟と秋瑾を記念するために、明末の文学や政治団体「復社」や「幾社」を継承しよう、天下の文人との交際を目指すために「神交社」を創設した。これは

南社の前身とらせる。

1909年11月、何度も話し合った上で同盟会会員の陳去病や柳亞子を首班とし、社員17人や来賓2人、計19人は（そのうち14人は同盟会会員）、蘇州の明末抗清志士の張国維祠で<sup>1</sup>中国近代文学史上最大規模の文学サークルである南社の成立を宣告した。

南社という名前の意味はすなわち南方を拠点に北方清朝の支配に抵抗するサークルであり<sup>2</sup>、成立の目的は「中国同盟会に呼応するために作られた文学研究機関<sup>3</sup>である。つまり、南社はただ単純な文学サークルだけでなく、文学の衣を借りて実質的に漢民族主義を宣伝して革命的な性質を持っていること文学サークルでもある。

南社の社刊は『南社叢刊』であり、1910年の刊行から1923年にかけて南社の解散に伴い休刊し、計22巻が発行された。内容は主に中国古典文学を体裁とする文、詩、詞の3つのプレートに分けられ、主な編集者は柳亞子であり、1910年に『白門悲秋集』は『南社叢刊』の増刊として出版された。また、1912年に創設された「太平洋報」は、南社の全盛期のシンボルとされている<sup>4</sup>。そのほか、南社のメンバーが参加した新聞は「民国新聞」、「民権」、「神州日報」などがある。

南社の主要な活動は雅集と呼ばれ、毎回の集会の内容は美食と飲酒を味わいながら文学創作の検討を行う。創社から解散まで計18回の雅集が行われ、そのうち16回は上海の愚園で行われた。

南社は設立されると当時の社会各界に人気があり、学者の統計によると1909年から1923年までに262人のメンバーが正式な集会に参加し、登録社

---

1 柳亞子『南社紀略』、文海出版社、1976年、12頁。

2 南社という名前の意味については、そのほか、もう一つ解釈は「鐘儀操南音、不忘本也」とある。寧調元「南社集序」、『首創民族主義文芸的「南社」』、成文出版社、1980年、2-3頁。

3 前掲書『南社紀略』、111頁。

4 盧文芸『中国近代文化変革与南社』、社会科学文献出版社、2008年、21頁。

員は最高1183人に達し<sup>5</sup>、南社が中国南方文化に根ざしているため、半分以上の社員が江蘇省、浙江省、広東省の出身である。南社のメンバーの職業と政治信仰などの構成は非常に複雑で、職業から見れば、その大部分は教育界（例えば陳望道）、政治界（例えば黃興、宋教仁）の出身が、医療衛生と宗教界（例えば蘇曼殊、李叔同）、さらには無職者も存在していた<sup>6</sup>。一方で、政治信仰から見れば、中国国民党、中国社会党、自由党など党派のメンバーも存在していた。かつて、南社の成立者の柳亞子は「ある時期、南京の行政院長は汪精衛であり、代理立法院長は邵元衝であり、司法院長は居覺生であり、考試院長は戴季陶であり、監察院長は于右任であり、中央党部秘書長は葉楚傖である。私は今日の域をみれば、なんと南社の天下なのであろうという冗談を言った」<sup>7</sup>とある。この言葉から、南社が隆盛した時の状態が明らかになった。

ところで、南社のメンバーは中国各地でそれぞれ南社の分社を成立した。例えば、越社（紹興）、遼社（瀋陽）、広南社（広州）、淮南社（南京）などがある。ついでながら1911年、魯迅は南社の分社（越社）に参加した。

しかし、南社のピーク時期はあっという間に過ぎ去ったため、五四革命と新文化運動の影響で、西洋文学と新文学はすぐに中国で大きな人気を集めて主流になり、中国古典文学を提唱してきた南社はこれまでの革命サークルから一夜にして文学革命で革命された対象になった。さらに、1917年、南社における、学術的観点をめぐる論争が発生したが、この論争はすぐに論争から人身攻撃に変わり、最終的には完全に南社の指導権の争いになった。この事件は南社に大きなマイナス影響を与え、柳亞子もショックで南社の主任を辞めた。

南社が終焉を迎えたのは、1923年の「賄選総統」案であり、南社の発

---

5 王德威主編『哈仏新編中国現代文学史（上）』、麦田出版社、2021年、241頁。

6 朱劍芒「我所在知道的南社」、『南訊』（第15期）、江蘇省南社研究会、2002年。

7 柳亞子『南社紀略』、上海人民出版社、1983年、251頁。

起人の一人である高旭を含む19人の南社社員が国会議員として曹錕の賄賂を受け取った。今回の収賄事件は清高と気節を自任してきた南社にとって致命的な打撃であり、同年12月まで活動休止だった。

一方で、1923年5月に南社と一線を画した柳亞子らは新南社を再創した。新南社は旧南社の一部分の人と新文化運動の一部分の人から構成され、同時に中国国民党を基礎として、三民主義を鼓吹し、民衆文学を提唱することを精神としている。毎年二回の会食会を開催し、社刊は「新南社月刊」であり、だが1号しか出版されず、1924年10月に三回目の会食会以降は新南社の活動も休止だった。

南社と新南社が活動休止以降、元の会員たちも南社と関連作品を次々と出版し、南社を偲んだことがある。例えば、1924年湖南に創刊された『南社湘集』、胡僕安の『南社叢選』<sup>8</sup>、柳亞子の『南社詩集』<sup>9</sup>、『南社詞集』<sup>10</sup>など、そのうち『南社湘集』の部分文章は日治時代の台湾の新聞紙に掲載されたこともある<sup>11</sup>。これらのことから、南社の影響力の深遠さの一斑を覗くことができると思われる。

南社が文学創作の面での大きな特徴は国学を基礎とし、「革命」と「反清復明」を宣伝の主旨としたことであり、引用された故事典故にも宋明理学の書から抽いたものが多い<sup>12</sup>。特に中国の伝統的な意味での漢民族の英雄岳飛、陸遊、文天祥を主な創作題材としている。例えば、『南社叢刻』の最初の文章は「登海陵岳墩弔岳少保文」であり、それ以外にも多くの文章（例えば、「為種流血文天詳伝」、「逐満歌」、「鄭成功」など）が明らかな民族主義色に満ちている。従って、汪兆銘は南社が推進した革命文学の清末革命における役割は「革命党人が勇敢に義に赴き、前進せず、百折不撓することができたのは、すべて革命文学によって自分の涵養と認知を高

---

8 胡僕安『南社叢選』、国学社、1934年。

9 柳亞子『南社詩集』、上海開華書局、1936年。

10 柳亞子『南社詞集』、上海開華書局、1936年。

11 『風月』（第34期、第35期）、1935年。

12 橋川時雄『民国期の学術界』、臨川書店、2016年、216頁。

めることである」とある<sup>13</sup>。

## 第二節 汪兆銘と南社

南社が成立した時（1909年）、汪はその時に北京で丁度良い摂政王の暗殺のために東奔西走していたので、南社の成立に参加しない。汪が南社に参加したのは中華民国誕生の同年の4月18日であり、彼は田桐、景耀月、陳家鼎の紹介を通して、南社の入社書を記入した（入社番号は260番）<sup>14</sup>。この時の汪は政府への入閣にきっぱりと首を横に振り、政治界からひきこもる意向を打ち上げたので、この段階ではほとんど教育、文学などの領域で活躍していた。

かくして、南社に加入してから同年秋の渡欧にかけて、汪の国内での活動は基本的にジャーナリズムに集中していた。例えば、1912年6月15日、汪は新改組の『民主報』（前身は東亜日報）のライターとし、7月25日上海『民国新聞』の総編集とした<sup>15</sup>。言うまでもなく、その二つの新聞社は「共和政体を保障し、民生主義を宣伝する」を宗旨とし、社員も基本的に南社の成員なので、南社の付属新聞紙と言ってもよいであろう。この後、汪は渡欧したので、南社での活動も暫く休止していた。

汪はあくまでも政治家の一面もあるので、南社での活動が他の南社の文人より相対的に活躍ではない。前述したように、南社の主要な活動は雅集であり、しかしながら、現存の資料によると、汪は18回の正式な雅集に一度も参加したことない、単なる1917年3月25日に南社の広東分社の雅集、1922年6月11日に上海で臨時雅集、1923年10月14日に上海で新南社の成立大会及び一回目の会食会、1924年5月5日に上海で新南社の二回

---

13 汪兆銘「南社叢選（序）」、「国学周刊」、1923年11月28日。

14 柳無忌等編『南社史長編』、中国人民大学出版社、1995年、274頁。

15 前掲書『南社史長編』、283、289頁。

目の会食会に参加した<sup>16</sup>。また、『雙照樓詩詞藁』から見ると、全詩集で南社成員と繋がりがある作品は1首だけであり、すなわち「江樓秋思図為柳亞子題」<sup>17</sup>。

汪の南社での地位については、1936年に南社の創立者の柳亞子は「南社の代表人物は汪精衛だと言える」<sup>18</sup>という断言がある。かつ、台湾東海大学の林香伶の統計によると、汪は南社の社刊『南社叢刻』<sup>19</sup>（計22巻）と『南社叢刻第二十三集第二十四集未刊稿』（計2巻）（以下未刊稿）<sup>20</sup>で掲載された文学作品が計61篇（そのうち、漢詩48首、文7篇、詞6首）である<sup>21</sup>。しかしながら、筆者の調査によると、もし単なる汪の名で『南社叢刻』（未刊行の第23、24巻を含む）に発表された文章を統計して加算すると、総数は61で間違いはないが、しかしもし文ごとによく調べてみると、重複の文章と偽作があることがわかる。つまり、実際の総数は61に至らない。かつ、そのうちの多くは『雙照樓詩詞藁』に収録されているが、収録されたタイトルは『南社叢刻』で発表されたものと異なり、内容も少し変更されている。その後、汪夢川は『南社叢刻』の中に誤収録された4首の詩詞（そのうち2首、汪の詞）に対して綿密な調査分析を行った<sup>22</sup>。ここで筆者は、南社叢刻に収録されているすべての汪氏の作品と『雙照樓詩詞藁』について、タイトルと内容などを整理し、比較してみたい。かくして、筆者の整理は具体的に下記の表である。

---

16 前掲書『南社史長編』、443、559、600頁。前掲書『南社紀略』、文海出版社、110-117頁。

17 『汪精衛詩詞新編：雙照樓詩詞藁：讀後記・手稿・集外首刊』、時報文化出版企業、2019年、30頁。

18 前掲書『南社紀略』、上海人民出版社、251頁。

19 『南社叢刻』（1-8冊）、江蘇廣陵古籍刻印社、1996年。

20 『南社叢刻第二十三集第二十四集未刊稿』、社会科学文献出版社、1994年。

21 汪夢川「汪精衛与南社代表人物説」、「江漢論壇」（2006年4月）114-116頁。前掲書『中国現代文化変革与南社』、29頁。

22 汪夢川「『南社叢刻』誤収録詩詞四首考述」、「天中学刊」（2019年4月）、91-97頁。

南社における汪兆銘の活動に関する小考（王）

『南社叢刻』での名前	『雙照樓詩詞藁』に収録されているかどうか	『雙照樓詩詞藁』での名前	文学体裁	『南社叢刻』での出処	メモ
1、獄中贈蕭小隱序	未収録		文	第6集	
2、邱樊倡和集序	未収録		文	第6集	
3、邱樊倡和集跋	未収録		文	第6集	
4、寄小隱	収録	春晚	詩	第6集	内容変更有：日→月 隔如→如隔
5、春日晚眺	収録	晚眺	詩	第6集	内容変更有：華→秀 妙→自 兩三→三兩
6、讀小隱詩感賦	収録	有感	詩	第6集	内容変更有：君詩→ 黃書 惘→泣 過→向 盡→帶
7、亭前偶見新綠口占一絕	収録	獄簷偶見新綠口占	詩	第6集	
8、為小隱提讀書圖	収録	獄卒持山水便面索題	詩	第6集	内容変更有：暮→細 江南紅葉一孤村→江 東雲樹擁孤村
9、答小隱	未収録		詩	第6集	
10-11、感事（2首）	収録	辛亥三月二十九日廣州之役余在北京獄中偶聞獄卒道一二未能詳也詩以寄感	詩	第6集	内容変更有：強→欲 離→間 寒→殘 殘→ 寒
12、臺城路	未収録		詞	第8集	汪の作品ではない
13、前調	未収録		詞	第8集	汪の作品ではない
14、金縷曲	収録	金縷曲	詞	第8集	内容変更有：限→窮 數襟期夢裏重攜手→ 訴心期夜夜常攜手 淚痕莫滴新詞透→淚 痕料漬雲箋透 窗→ 衾 多情→故人 河山 →關河 又逗→難又

15、處女黎君墓誌	未収録		文	第9集	
16、與雷鐵崖書	未収録		文	第9集	
17-18、獄中有贈 (2首)	収録	獄中雜感 / 秋夜	詩	第9集	「獄中有贈」は2首があり、そのうちの1首は「獄中雜感」(2首)中の1首であり、もう一つの名前は『雙照樓詩詞藁』での名前での「秋夜」である。 「秋夜」内容変更有： 如→猶 終→雖 啼→唬
19、感事	収録	獄中閒溫生才刺孚琦事	詩	第9集	
20-23、口占(4首)	収録	被逮口占	詩	第10集	内容変更有：赫→染
24、贈小隱	未収録		詩	第10集	
25、西風	収録	獄中雜感	詩	第10集	「獄中雜感」は2首があり、「西風」はそのうちの一つであり、もう一つは第9集「獄中有贈」(2首)中の一つである。 内容変更有：多→含 幸有→多謝
26、楊忠愍祠前樹	収録	詠楊椒山先生手所植榆樹	詩	第10集	内容変更有：參天老幹無蟠節→疏陰落落無蟠節 振葉西風有恨聲→枯葉蕭蕭有恨聲
27、答小隱	未収録			第10集	
28-32、雜詠(5首)	未収録			第10集	



南社における汪兆銘の活動に関する小考（王）

33、寒夜背誦古詩直波瀾誓不起妾心古井水歎為妙句而以其意未盡也詩以足之	収録	寒夜背誦古詩直波瀾誓不起妾心古井水美其詞意為進一解	詩	第10集	内容変更有：涵→淳丈→尺
34、睡起偶吟	収録	中夜不寐偶成	詩	第10集	内容変更有：冷→飄清→波 茫茫→茫然寒→秋 苦→自 啼→唬
35-36、除夕（2首）	収録	除夕	詩	第10集	内容変更有：倚枕不成寐→今夕復何夕長→危 闕→定 蒼茫追漢臘凄咽聽吳謳→河山餘磊塊風雨滌牢愁年→韶
37、辛亥獄中述懷	収録	述懷	詩	第11集	内容変更有：少→幼悚→疏 墳→庭 凝電→如斫 淒→莫 雄→椎 亦→嗟 駭如怒馬馳飛塵姿騰蹕→有如寒潭深，潛虬自騰轡
38、雪	収録	大雪	詩	第11集	内容変更有：曉→朝笑→叫 寒→銀 丈→傾 弄→助 鏡→白 直→欲 輪→壺 擬→咽置→擲
39、雪中偶見梅花折枝感賦	収録	見梅花折枝	詩	第11集	内容変更有：開→斜風→秋
40、見人折車輪為薪感而作歌	収録	見人折車輪為薪為作歌	詩	第11集	内容変更有：硬質→倔強 撥盡→擲向
41、夢中得詩醒而遺其半追摹夢境足而成之	収録	夢中作	詩	第11集	内容変更有：葉→棹漸→分一抹→漠漠
42、入獄一年矣慨然賦此	収録	感懷	詩	第11集	内容変更有：當→方八千→三萬

45、辛亥獄中誤聞漢民凶信（3首）	収録	辛亥三月二十九日廣州之役余在北京獄中聞展堂死事為詩哭之饑成三首復聞展堂未死遂輟作	詩	第13集	内容変更有：願→幸 惟→卻 堪→禁 憶昔 →落落 韋弦→弦韋 相→曾 曾→相 餘子 →過眼 悽→愁
46、舟中感懷	収録	印度洋舟中	詩	第13集	内容変更有：向誰→ 幾時 繞→劇作→惜
47、譯佛老里安寓言詩	収録	譯佛老里昂寓言詩一首	詩	第22集	内容変更有：如→還 西→東 狗→犬 來→ 還 顧→歡 沈吟→鳴 咽 日月光覆照→造 物者用意 我與爾→ 兄與我 慮→虞 創痛 →瘡痍 又→尤 驚魂 不忍思→驚跌不能移
48、歐戰中避兵閩城書所見	収録	歐戰即起避兵法國東北之閩鄉時已秋深益以亂離景物蕭瑟出門偶得長句	詩	第22集	
49、遊莫干山	収録	遊莫干山	詩	第22集	内容変更有：吐→跳 萬千→千萬 莫→黝 願→欲
50、黃花崗七十二烈士墓下作	収録	十年三月二十九日黃花崗七十二烈士墓下作	詩	第22集	
51、同展堂遊張家口雲泉寺	未収録		詩	第22集	
52、同展堂遊昌平十三陵	収録	遊昌平陵	詩	第22集	内容変更有：萬里來 遊日未遲→想見塵清 漠北時 傷燕→燕仍 空汗→汗已

53、賣花聲	収録	浪淘沙	詞	第22集	内容変更有：霜落晚楓丹千里→江樹暮鴉翻千里
54、百字令	収録	百字令	詞	第22集	内容変更有：冰心一片好攜來 長在玉壺中住→冷然風善忽吹來 人在廣寒深處 水佩生寒風裳自捲人與花同舞 明湖瑤大醜顏 應為君駐→孤嶼如樽 明湖似瑤好把醜顏駐 酒醒夜白寒雲枕下來去
55、蝶戀花	収録	蝶戀花	詞	第22集	
56、答友人書	未収録		文	第23集	
57、與陳蘿生書	未収録		文	第23集	
58、譯佛老里安寓言詩	収録	譯佛老里安寓言詩一首	詩	第24集	第22集と重複。
59-61、歐戰中避兵閩城書所見（3首）	収録	歐戰即起避兵法國東北之閩鄉時已秋深益以亂離景物蕭瑟出門偶得長句	詩	第24集	第24集と『雙照樓詩詞藁』に収録されている詩はいずれも第22集の詩を踏まえた上で新たな内容を加えたが、それぞれ加えた部分は異なる。

注：1 表の中の作品は『南社叢刻』（未刊行の第23、24巻を含む）と『雙照樓詩詞藁』の表記（すなわち繁体字）を標準とする<sup>23</sup>。

- 2 文学作品が表中での配列順序は『南社叢刻』に現れる順序を基準とする。『雙照樓詩詞藁』にはいくつかの版本がある。本稿では、主に参考、引用したのは1950年代に香港で出版された『雙照樓詩詞藁』（通称永泰版）を底本とする。
- 3 括弧の中の詩の数はすべて本の著者が注釈したもので、筆者が注釈したものではない。
- 4 「内容変更有」とは、同じ詩だが、『南社叢刻』に掲載された内容と『雙照樓詩

23 ここで注意したいのは、前掲書『南社叢刻第二十三集第二十四集未刊稿』全書の表記は簡体字であるが、統一のために、表の中の作品は繁体字で表記する。

詞藁』に掲載された内容は対照的に、一部の字と文の変更がある。矢印の前の文字は『南社叢刻』の内容であり、矢印の後の文字は『雙照樓詩詞藁』の内容。異体字など同じ意味の部分は含まれていない。

ここで注意したいのは、「臺城路」、「前調」、「譯佛老里安寓言詩」、「歐戰中避兵閩城書所見」である。まず、『南社叢刻』と未刊稿については、説明したい。「『南社叢刻』(1-8冊)が江蘇廣陵古籍刻印社は『南社叢刻』の原本による復刻したものであり、未刊稿は「南社概要」で言及したように、柳亞子が南社主任を辞めたものの、南社の中での地位のため、原稿が依然として続々と彼の住所に送ってきた。彼は南社に対する愛情が深いため、自分は原稿を整理してから他人の原稿を清書し、そして自分で校正し、タイトルをつけたからだ。最後に『南社叢刻第二十三集第二十四集未刊稿』という2冊の本を編集したが、ずっと出版されず、1994年に初めて出版された<sup>24</sup>。未刊稿の校正者も本の序言で、「本人仅将其竖抄改横写，繁体易简体，略为分段，将以标点，调整了数首诗的位置。由于原本抄完以后，柳亚子未有认真过目（後略）」<sup>25</sup>（日本語訳：本人は縦写を横書きにして、繁体を簡体に、少し区切りにして、句読点を加えて、いくつかの詩の位置を調整した。清書が終わった後、柳亞子は真剣に目を通したことがない（後略））とある。

そして、先述した4つの詩詞について、説明していく。

まずは第8集に収録された2つの作品（臺城路，前調）であり、この2つの詞は『雙照樓詩詞藁』に収録されていない、筆者が当時南社と汪と密接な関係にあった出版物『南社詩話』を調べると、この二つの詞は汪本人に確認したところ、他の人の作品に誤って汪の名前をつけたのであり、汪の作品ではない、つまり誤記であることが分かった<sup>26</sup>。そして、汪夢川はその研究の中で、この2曲の原作者は実際に南社の社友潘飛声であると指

---

24 張堂錡『現代文学百年回望』、万卷楼、2012年、97頁。

25 前掲書『南社叢刻第二十三集第二十四集未刊稿』、3頁。

26 『汪精衛南社詩話：原稿首刊』、時報文化出版企業、2019年、84頁。

摘した<sup>27</sup>。

次に、22号に掲載された詩「譯佛老里安寓言詩」は、また未刊稿の第24集に収録されている。筆者が二つの詩を照らし合わせた結果は全く同じであり、つまり重複である。これは、整理者のミスであろうと想定している。

最後、「歐戰中避兵閩城書所見」のこと。南社叢刻と未刊稿に収録されている「歐戰中避兵閩城書所見」をよく比較すると、未刊稿は南社叢刻の中でもともと1首として数えられていた詩を3段に分け、目録に3首と表記していることがわかる。そして、この未刊稿の24巻の「歐戰中避兵閩城書所見」は第22集に掲載されている「歐戰中避兵閩城書所見」と比較すると、一部に新たな内容があり、しかも、未刊稿は新たな部分を1首とし、そしてもともと南社叢刻で、すでにある詩を真ん中から切り取って、2首の詩に分けた、これで3首となる。しかし、新たな部分は『雙照樓詩詞藁』に収録されていない、あわせて『雙照樓詩詞藁』も『南社叢刻』と同じ、既存の部分を1首として見る。かつ、他の南社叢刻に収録されている詩詞と『雙照樓詩詞藁』に収録されている詩詞を比較すると、ただ少しの字と語彙の違いに過ぎず、これほど大規模な新たな内容の追加はない。

そして『南社叢刻』と未刊稿が発表されたタイムラインの順序と詩の内容とフォーマット及び前の3首の詩の間違いから見ると、筆者は新たな部分は整理者あるいは抄録者が他の人の作品に誤って汪の作品になり、そして、すでに既存の部分を分け、2首と計算するのは恐らく抄録者が以前に南社叢刻に掲載されている詩を読んでいない、自分の意志に従って区切ったことではないだろうかと思われる。また、このような状況になった理由について、汪夢川もその研究で「柳亞子と姚鶴雛の無責任な態度が前にあっただけでなく、後の研究者もそれを区別せずに間違いが次々と伝わったため、上述の誤りは今まで踏襲されてきた」とある<sup>28</sup>。

27 前掲文「『南社叢刻』誤收詩詞四首考述」、92-94頁。

28 前掲文「『南社叢刻』誤收詩詞四首考述」、95頁。

以上のように、筆者は第24集と第22集の「歐戰中避兵閩城書所見」を同じ1首とみなされるわけ、その他2首の誤記と1首の重複を除去すれば、汪は『南社叢刻』（未刊稿を含む）での文学作品が実は61首ではなくて55首であるはずなのではないだろうかと思われる。

ところが、汪は『南社叢刻』に発表した作品を鳥瞰すると、ほとんどは彼が摂政王を刺殺して失敗した後、捕虜になった時に作ったもので、主に革命の気持ちを表現しているが、これも南社が提唱した革命文学のスタイルにぴったり合っている。そして、汪の文学レベルと当時の中国での影響力を加えると、柳亞子がなぜ汪を南社の代表人物と呼んだのか理解に難しくないだろう。

その他、南社解散後、元南社の成員の胡僕安は『南社叢刻』中の文を選択、編集して、『南社文選』<sup>29</sup>を出版した、汪はその本のために「序」<sup>30</sup>を作成した。そして、汪の同時代に『南社詩話』という本があるが、その著者の名前は「曼昭」であり、その「曼昭」は汪兆銘であるかと考えている学者もいる<sup>31</sup>。

### 第三節 おわりに

汪は南社での活動内容は多くないが、依然として南社を代表する人物とされていた。なぜかという、そのうちの一つの原因は汪の性格が南社の性格と非常によく合っていると思われる。汪は「文字で人を励ますのが得意で、満州族に反対する情熱に満ちている」、汪の漢詩の中に「精衛情結」を満ちている<sup>32</sup>、すなわち、ある烈士コンプレックスで、彼は自分の信念のために、20代の時に命を捨てて摂政王を暗殺しようとしたが、50代に

---

29 胡僕安『南社叢刻』、国学社、1936年。

30 前掲書『南社史長編』、597頁。

31 汪夢川「汪精衛与曼昭及「南社詩話」考弁」、『南京理工大学学报』（社会科学版）28卷1期、2015年1月、12-18頁。

32 葉嘉瑩「汪精衛詩詞中的「精衛情結」」、『印刻文學生活誌』、2009年、104-117頁。

なって自分の持っている地位と名声を捨てて、日本人と協力した。この信念の背後には、実は悲壮感に満ちた個人的ヒロイズムがある。一方で、南社は特殊な歴史的背景の下で設立された革命的で文学的な団体であり、文人を主な集団として構成された団体であり、その基調は「悲しみと感傷に満ちた情緒である」<sup>33</sup>。

ちょうどこのような多層的な革命と叙情、政治と文学、個人と団体の多次元の有機的な結合で、汪と南社は互いにも達成することができたと言えるだろう。南社の存在は中華民国成立後に汪が政界を去ることを決意した後の生活のために適切に別のプラットフォームを提供し、南社に掲載された漢詩詞も政治家としての身分以外の汪氏のイメージを世間に示した。南社は当時まだ世間の人々が英雄と見なしていた汪の詩を自身の機関誌「南社叢刊」に掲載し、当時多くの文人が汪の詩に同調するために自分の詩を投書した。これは間違いなく南社の社会的影響力と発行量も増加した。

しかし、汪本人の特殊性によって多くの学者がその研究と観察を政治面や政権中心に集中してきたため、汪の文学面での考察には大きな余地がある。同時に、南社の研究にはすでに多くの成果があったが、筆者は関連する先行研究を読んで、大部分の学者が南社の関連論文の中で汪についてほとんど口を噤んで話さなくて、一筆も持っていなかったことを発見した。これはおそらく汪の身分上の特殊性によるものだと思う。そのような背後にある政治的な意味に満ちた懲罰と報復行為は、学術研究などに不利であることは間違いなく、そのためには是正される必要がある。また、汪は以前、同盟会に参加して急進的な手段で革命を行うと主張していたが、南社との関係も彼の性格の中のロマン主義的な特徴を暴露しているため、両者の関係の探究を深めることは汪への理解を深めるのに役立つと思われる。

したがって、筆者はこの両者は中華民国史上で極めて影響力をもち、すなわち、汪はかつて中国ひいては北東アジアの歴史の行方を変えたが、南

---

33 張春田『革命与抒情：南社的文化政治与中国現代性（1903-1923）』、上海人民出版社、2015年、331頁。

社は中国の近代文学史と革命史の両方で重要な地位を占めている。この両者の関係を明らかにすることは、中華民国史全体の発展と関連分野に対する認識のさらなる促進に役立つことは間違いないのではないだろうか。

中華民国112年秋  
オークランド、乳国